

# 身体論的アプローチによる体育学習の試み

岩間英明<sup>1</sup> ・ 根本賢一<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>裾野市立西中学校、<sup>2</sup>松本大学松商短期大学部)

## 目次

1. はじめに
2. スポーツと二つの身体観
3. 体育科教育におけるスポーツ
4. 現在の体育の学習構成
5. 具体的な授業実践
6. まとめと今後の課題

## 【参考文献】

## 1. はじめに

現在、アレル・キレル・ムカつくなどの心の問題が、子どもたちの逸脱行為や反・非社会的行為につながるだけでなく、「起立性調節障害」「過換気症候群」などの様々な身体症状を呈するレベルにまできている。そのため、文部科学省は平成10年の学習指導要領の改訂において、新たな学習内容として「体ほぐし」を示し、こうした子どもたちの心とからだの問題に、体育科が授業を通して積極的に関わるよう要請している。

また、今冬のトリノオリンピックで金メダリストとなったフィギアスケートの荒川静香選手に代表されるように、各種競技団体は全国各地でトレーニングセンターを運営し、早い段階から、素質のある子どもを指導してトップ選手への引き上げを試みている。これは、これまでに何度となく議論の対象となってきた少年団や部活動によるスポーツの過熱問題と背景的には似ており、それまでの勝利至上主義とは別の様相を示しながらも、専門性をより強めるといった点で、現在の子どもの取り巻くスポーツ環境の大きな要素を構成している。しかし、そうしたトップスポーツの低年齢化が目立つ一方で、学校現場ではスポーツや運動に対して、忌避的な子どもたちの存在も、非常に目立つようになり、よく言われるスポーツの二極化はより顕著になってきている。

さらに、体育学習の別側面の課題としては、子ども達の体力・運動能力の低下が続いていることがあげられる。文部科学省の2004年度「体力・運動能力調査」では、9歳男子の50m走の平均記録が、約20年前の9歳女子の水準にまで落ちたことがわかり、新聞紙上を賑わしたのは記憶に新しい。

こうした状況の中で、体育学習は、その意味や在り方について、再考しなければならないことを多方面から指摘されている。そこで、「身体」「スポーツ」をキーワードとして、子どもたちの生の豊かさにつながるような体育科教育の在り方について、特に中学校保健体育科の授業実践レベルにおいて、どのような体育の学習構成ができるのか考えてみたいと思う。

## 2. スポーツと二つの身体観

古代オリンピック以来、スポーツは宗教、政治、教育など多様な側面を持ち、様々な形態が見られたが、根源的な共通項として存在しているのは「身体」である。そうした意味から言えば、スポーツは「身体の活動により生ずる人間的な価値を持つ事象である」と措定することは誰もが認めるところであろう。そのため、スポーツは直接的であれ、間接的であれ、身体と不可分な関係で結ばれており、スポーツを学ぶ体育学習においても身体は、重要なキーワードとなる。

さて現在、身体については大きく二つの見方がある。その一つは身体を純粋な外在的存在とみなし、自然的・物理的世界の一対象として論じる視点であり、もう一つは伝統的な心身問題に見られるように、精神の活動との関わりにおいて身体を論じる視点である。

身体はそれ自身の生理学的機構を備えている。この身体の機構を物理的空間に位置づけ、物理的・化学的な刺激とそれに対する身体機構の反応という図式をもとにして、因果論的に身体を考察するのが第一の立場の基本的な態度である。

それに対して、身体は単なる世界の一対象としてではなく、行為においてはわれわれの意志の器官として生きられているとするのが第二の立場である。ここでは身体は精神の作用によって外的な存在ではなく、精神的な活動自体が身体的な基盤の上に立っているとする身体である<sup>1)</sup>。

前者を「心身二元論」に基づく「客体としての身体、器官としての身体」、後者を「心身一元論」

に基づく「主体としての身体、精神としての身体」として捉えていってもよいだろう。

「客体としての身体」観に基づくスポーツは、運動生理学やバイオメカニクスなど、一般にスポーツ科学と呼ばれる分野に代表されるものであり、身体を一つの客観的なマシンとして扱う。このような考え方に依拠するスポーツの関わり方は、近代西欧スポーツに顕著に見られ、身体の外側や、表面に現れるいわば目に見える形での力や技の強さ美しさに着目し、いかに速く、どれだけ速く、どれほど強く、身体的能力を外に表しうかがが競われ、かつ、それを客観的な数値で計測する、という関わり方である。

このようなスポーツの関わり方では、遠くに到達できればできるほど、速ければ速いほど、技が高度であればあるほど、客観的評価は高まるし、強さによって勝ち続ければ続けるほど、勝者を一方的に褒めそやす。しかし、その時そのスポーツをする者の内面で何が起きているのかという眼差しは存在しない。外に表された華麗で力強い結果に至るプロセスの中で、人の身体がどんなに歪もうと、精神がひどいダメージを受けようと、この関わり方はおかまいなしに客観的計測で人を計り続けようとする<sup>2</sup>。言うなればチャンピオンスポーツに代表される“結果としてのスポーツ”“人が従属するスポーツ”ということが言える。

一方、「主体としての身体」観に基づくスポーツは、チャンピオンスポーツとしてではなく、どちらかと言えば、私たちの日常生活で行われるレクリエーション的なスポーツの関わり方や、近年の極端なゲーム化がなされる前の武道のようなものがあげられる。そうしたスポーツは、勝敗や客観的数値はそのスポーツに区切りやリズムを持たせるものとして存在するが、決して最終的な目標とはなり得ない。むしろ、それ以上に自己の心身の内面のありようを重視する。それは快感覚であったり、何ものにもとらわれない安寧の心であったりする。また、こうしたスポーツの関わり方では身体は様々に変容する。

例えば、運動会に向けて「ムカデ競争」の練習をしている子どもたちを見ていると、最初の頃はリズム、アクセントといった動きの所作は一人ひとりがバラバラである。ところが、それが練習するにつれ、動きはそれぞれの身体の所作であると同時に仲間身体にも同調し、あたかも一つの身体であるかのように動けるようになる。さらに、練習を重ねていくと、意識的に仲間と合わせる必要がないほど、互いの身体は融合し合い同一の身体となる。亀山<sup>3</sup>はこうした身体の変容を、融合の対象の違いから「共同性の身体」と「超個性性の身体」に分け注目している。このように「主体としての身体」観のスポーツの関わり方は、自己目的的で共感し合う人々にとって苦痛のない関わり方であり、“過程としてのスポーツ”“人が主役のスポーツ”ということが言える。

このように、スポーツは身体の捉え方によって大きくその様相を変容させる。近代合理主義が、科学の発達こそ文明の発達につながるという偏った幻想を抱かせたのと同様に、今日のスポーツは近代の思想そのままに身体を客体化しつづけてきた。それはこれまで「身体活動による事象」であると理解されてきたスポーツが、「実体化」「規範化」への道を歩み始めたことにも繋がるのである。身体活動によって生成される「コト」からスポーツそれ自体が「モノ」へと変容し、スポーツはそれをする人間の意図や身体によって様々に変化することのできる「しなやかさ」を失い、頑ななまでに自らの姿を変えることを拒むようになった。さらには人間に対してスポーツへの従属を迫るようになり、人間は無意識のうちにスポーツに合わせて身体を客体化していったのである。そして、スポーツは身体に有益なものとして、また、スポーツの立場からは、いかに運動器官として身体を効率よく合理的に使って記録や技を向上させるかということに着目させるのである。そういったスポーツの関わり方が、さも理想のスポーツの姿であるような幻想を抱かせたのが、身体の客体化によってもたらされたスポーツの意味ではなかっただろうか。

しかし、もう一方の「身体は決して器官として客体化される対象ではなく、人間の生の存在そのものとして理解されるべきものである」という身体観に立てば、スポーツとの関わり方は、スポーツをすることで身体が何を感じるか、また、あるがままの身体を感じを生かしてスポーツをすると

いう意味がスポーツの価値として問われるようになるはずである。例えば、これまでの「客体としての身体」観から言えば、スポーツの関わりとしてさして重要な意味付けをしてこなかった「スポーツの観戦」というスポーツの関わり方に対して、中村<sup>4</sup>は『スポーツを観戦することにしても、共感や応援などという、選手との身体的な相互行為があるから、そこに他人事として見ている以上のことが成り立つのである。』とし、「主体としての身体」の立場から、スポーツ観戦にも、スポーツの「経験」としての一つの意味と価値を与えている。こうした文脈で語られるスポーツの関わり方は、これまでの合理主義的身体観から付与されたスポーツの意味や価値が、非常に偏った狭いものであったという批判的反省の上に立たせるという意味で重要な示唆を与え、今までのスポーツ観を大きく変貌させる契機となるはずである。

### 3. 体育科教育におけるスポーツ

身体観の違いにより、それぞれに別の様相を示すスポーツを体育科教育は、これまでどのように捉えてきたのであろうか。

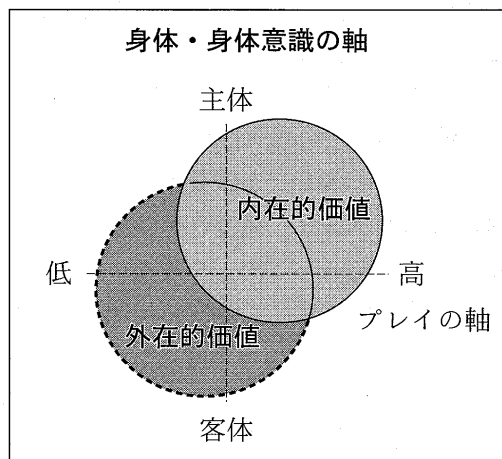
わが国の体育学習におけるスポーツの登場を明治14年の「小学校教則綱領」の「遊戯」という言葉で表現されたものが最初である。と考えると、輸入文化としてわが国に入ってきたものとしては、かなり早い時期に全国規模で実施されたことになる。その背景には一連の近代化政策の存在を読みとることができるが、そうした国策の中でスポーツはどのような価値を持っていたかと言えば、近代国家建設に必要な強健な身体と精神を持った国民を運動を手がかりに鍛錬するという他にない。それは、戦闘に必要な機敏な動作を生むために、ナンバの動きという日本人の身体技法や、からだの中心を頭でなく腹におく日本人の身体意識の転換、言うなれば「身体の近代化」を促進することであり、それとともに、ときの社会的秩序を可能にする身体を形成するという「身体社会化」を目指すためのものであった<sup>5</sup>とみることができる。このように、スポーツを専ら身体への刺激手段としてとらえ、身体形成の手段として利用する状況は第2次世界大戦まで続き、教科教育の立場からは「身体教育」と呼べるものである。

戦後は民主主義国家の建設という新教育の思潮を受け、からだを対象とすることから心身一元の存在・全人(a whole man)としての教育を対象とする転換が図られ、体育は教育に統合される領域として、教育の普遍的目標を成就するために、スポーツを利用することとなった。それはスポーツを他の価値の実現のための手段とする点では、それまでと何ら変わりのないことであるが、スポーツをすることで求められる価値が「からだ」のみに関係づけられるのではなく、広く「知・情・意・体・社会性・道徳性等人間の全面的発達」にかかわる教育価値一般（人格形成全般）の実現に向けられるところで、大きな相違をみせるものである<sup>6</sup>。これはスポーツが「全人的人格形成に寄与することができる。」ととらえられたことを意味している。教科教育の立場からは「スポーツによる教育」と呼ぶことができ、戦後から今日に至るまで主流的な体育科教育の考え方として受け入れられてきた。

しかし、その一方で「スポーツは人間にとって本質的にどのような意味、価値をもつ存在なのか。」「根源的に人間はスポーツに何を求めているのか。」ということが、人々の日常生活におけるスポーツの様相から問題にされ、学校体育におけるスポーツの手段的な取りあげ方に疑問が出されていた。その後この問題について、竹之下<sup>7</sup>らが中心となってホイジンガ、カイヨワのプレイ論に基づいた新しいスポーツの解釈の可能性を示した。スポーツをプレイととらえることで、スポーツの本質的価値、つまり内在的価値を「楽しさ」に求める視点を確立し、体育科教育は人間のスポーツに対する「欲求」や「必要」の充足の学習と位置づけた。そして、そのスポーツがもつ内在的価値によ

ってなされる作用（機能的特性）が人間とスポーツを結ぶ原点であるとする考え方が打ち出されてきたのである<sup>8</sup>。そうした視点で見れば、スポーツの価値はスポーツとそれをする人間の間に生成され、「スポーツをスポーツとしてスポーツすること自体（まるごとの全体）」<sup>9</sup>が目的となる。また、そうしたスポーツのあり方に教育的な価値を見いだそうとしているのが、教科教育の立場という「スポーツの教育」であり、「機能的特性」を中核として展開された、いわゆる「楽しい体育」である。

以上のように、これまでの体育学習におけるスポーツの価値付けの変容を概観し、スポーツの価値を「身体」と「プレイ」という二つの軸であらわした場合、そのとらえ方は右図のように示すことができる。スポーツは「主体としての身体性」と「プレイ性」が、高まれば高まるほど、本質的な価値（内在的価値）である「楽しさ」に近づくことができる。また、外在的価値は多くの場合、スポーツをした結果において派生することから、内在的価値の種概念としてみる事ができる。そのため、あまりに外在的価値に重点を置くと、スポーツの本質である「楽しさ」に触れることができないという危険を孕んでいる。体育科教育におけるスポーツの価値の変遷は、この外在的価値の重視から、内在的価値の重視へとスタンスを置き換えてきた変遷であると言ってもよい。



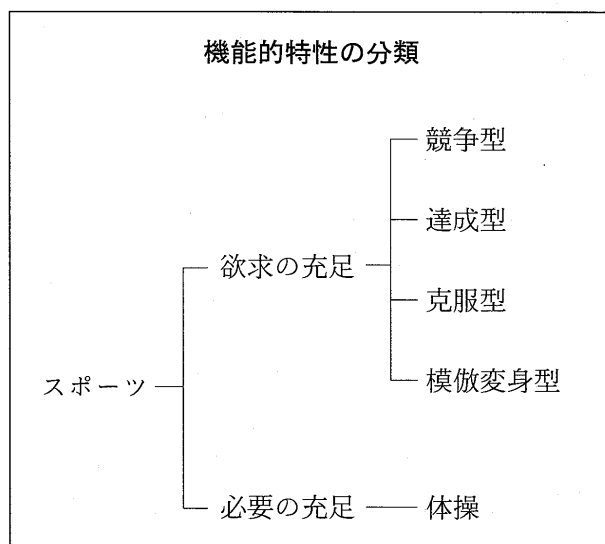
また、体育科教育におけるスポーツはその時々を背景として「身体の教育」から「スポーツによる教育」、さらには「スポーツの教育」へと価値付けがなされ変化してきた。それは、スポーツを別の教育目的のために使う「手段的スポーツの学習」から、スポーツそれ自体を学ぶ「目的的スポーツの学習」への変容とも捉えられるであろう。

#### 4. 現在の体育の学習構成

これまでの体育学習では「客体としての身体」「主体としての身体」という二つの身体観、「手段的スポーツの学習」「目的的スポーツの学習」という二つの学習観の存在により、スポーツを学ぶ意味や立場が変わってきていた。

現在、体育の学習構成をするための中心的な理論は、「楽しい体育」と呼ばれる運動の機能的特性を中核とする考え方である。「楽しい体育」は、昭和52・53年の学習指導要領において方向づけられ、平成元年の改訂で完全にわが国の体育科教育を考える上で、中心的な理論となり今日に至っている。

それは、プレイ論に基づく学習内容がスポーツの機能的特性によって目標と一致した形で明らかにされ、構造化されることを示しており、その具体的な内容が、「機能的特性の分類」として右図のように示された



のである。そこであげられた主たる機能は、「必要」と「欲求」の充足であり、欲求の充足はさらに、「競争」「達成」「克服」「模倣変身」と分類された。この分類はそれまでのスポーツの「効果の類縁性」や「技術構造の類縁性」を視点とする分類とは異なり、人間とスポーツの関係を視点とする「スポーツの機能」を基準とするスポーツの分類である。こうした分類は学習内容の構造化へとつながり、スポーツの「機能的特性」を中核とした学習内容のまとまりを提示し、授業の組織化が図られることを意味する。

このようにプレイ論に基づく学習内容は、これまでのような客観主義的な認識の下で獲得し、身につけるべき具体的な対象（モノ、コト）として位置づけられるのではなく、子どもの側からの欲求や必要の充足内容を示す主観主義的な認識の下での「楽しさ」とその「楽しみ方」が、スポーツの機能的特性と分類を前提として位置づけられ、構造化されるのである<sup>10</sup>。

つまり、それまでの体育では、スポーツは学習の目標を達成するための手段であったため、学習内容は体力が高まるかどうか、社会性が身につくかどうかといったスポーツによる諸効果に基準をおく特性「効果的特性」やスポーツの技術的な特徴や構造の仕組みに注目し、技術の習得を基準におく特性「技術構造的特性」に観点が置かれ、スポーツは学習を行わせる者の立場からとらえていた<sup>11</sup>。

それに対し、プレイ論から導き出される体育は、豊かなスポーツライフに結びつくことを目的として学習に参加させるものであった。、そのために自発的・自主的なスポーツへの参加を柱とする<sup>12</sup>ことから、学習を行う者（子ども）の立場から捉えられ、「からだのはたらきを維持し高めようとする、からだにとっての必要充足」あるいは、「活動それ自体が目的であり、自由で自発的に楽しさ・喜びを求めめるための欲求充足」というスポーツの特性が学習の内容となった<sup>13</sup>、ということである。したがって「機能的特性」とは「スポーツの意味と価値は、行う者にとってのスポーツの機能にあると規定され、スポーツの機能、つまり個別的な必要や欲求の充足である。<sup>14</sup>」と言うことができる。このように、運動の機能的特性論は「手段的スポーツの学習」「目的的スポーツの学習」という学習観の視点において、ある一定の結論を導き出すことに成功した。

しかし、身体観のうち「客体としての身体」については、体力テストのようにはっきりとした学習がすでに行われているのに対して、「主体としての身体」という視点についての学習はいまだに概念的であり、具体的な学習構成は十分とは言えない。それでも小学校段階では、基本の運動を中心にいくつかの実践例がみられるが、中学校ではほとんどそうした実践はみられない。その大きな理由は、主体としての身体観が自己の心身の内面のありようを重視するということから、学習としてどのように成立するのか整理されていないことが最も大きな理由であろう。

例えば、体育館のクライミングロープにつかまって、いかにも楽しそうに、振ったり、まわったりしている子ども。決して競争しているわけでも、何回続けると目標を持っているわけではなく、延々と続くテニスのラリーやソフトボールのキャッチボールを楽しそうにしている子ども。ペースを上げるわけでも、かといって下げるわけでもなく、長い距離を黙々と走って、走り終わった後「気持ちよかった」とつぶやく子ども。こういった子ども達の姿は、決して特別なものではなく、どこの学校でもみられるごく日常的な授業中の姿であるのだが、現在の機能的特性の分類には、そういった子どもの運動を楽しむ姿を入れ込むカテゴリーは存在していない。そして、多くの教師はこのような運動について、学習としてはどのような価値があり、どのような意味として取り出してよいかわからないため、学習として認めることができずにいる。

では、そうした子どもたちの運動は意味づけすることができないほど、価値のないものなのだろうか。いや、彼らの表情や態度からは決して無意味な運動ではないことは明白であり、身体を視点とした立場からも無視できないものであるといえよう。現在の運動の機能的特性では分類できない重要な体育学習がそこには存在しており、内容から考えて身体論からのアプローチが必要な学習であると言える。

このような身体観に関わる快感情について、すでに青木は<sup>15</sup>「内容的快感」と「機能的快感」という二つのレベルからとらえている。前者は達成された目標の内容によって成立し、後者は活動そのものの中に即時的に存在している快感情である。そうした視点に立てば、彼らの運動の楽しさは、身体論的な「機能的快感」としてとらえることができるはずであり、運動の楽しさの一面をあらわしている重要な要素と考えられる。

## 5. 具体的な授業実践

このような身体論的な立場からのアプローチが必要な体育授業とは、どのようなものになるのか、その具体を提案授業のかたちで示してみる。

単元名 長距離走を「楽しく」「速く」「長く」…etcで走ってみよう（選択制授業）

対象 S県S市立中学校 第3学年 男子60名 女子62名 計122名

### 単元の構想

中学生にとって陸上競技、とりわけ長距離走はスポーツとしての魅力を感じない運動教材であり、長距離走を「好き」「まあまあ好き」と肯定的に捉えている生徒は、全体のわずか14%に過ぎずであり、ほぼ全員の生徒が嫌悪感を持っている単元である。その理由は運動が単調で、練習自体が大変に苦しく、苦痛を伴い、その割には、授業という限られた時間の中では記録の飛躍的な向上が望めないということを経験的に知っているからである。（オリエンテーションにおける生徒の反応から）

しかし、生涯スポーツという観点から考えてみると、陸上競技は多くの人々が日常的に手軽に取り組んでいるスポーツ種目である。中でも、生徒からの拒否反応が強い「長距離走」は「ジョギング」と名称が変わり、月刊誌が出されるほど多くの愛好者がいる。一体その相違点はどこに由来するものなのか。それを考えてみると、学校体育のマイナスの特徴が浮き彫りにされるのではないだろうか。

一般的にジョギング愛好者は、走る目的は様々であるが、「走る」という運動そのものの魅力を一様に感じている。一方、学校体育では走運動の結果である「記録」を重視し、生徒に「記録の向上」という価値観を植え付けてしまったため、記録を向上させるために、生徒は常に頑張らなければならない状況に追い込まれてしまった。そうした常に頑張らなければならないという苦しさの中でも、生徒は記録が向上している間は喜びを見出すことができたが、記録の向上が鈍化し始めたとたん走る喜びよりも、苦痛の方を強く感じるようになってしまったのである。こうした現実には『生涯にわたってスポーツを愛好する生徒の育成』という保健体育科の根幹的な目的を考えた時、避けて通れない大きな問題点となる。

そのため本単元では、従来から選択制授業で行ってきた「種目選択」ではなく、どのように長距離走に取り組むかという「関わり方の選択」の視点を取り入れることで、長距離走を身体論の視点、さらには、生涯スポーツの観点からの捉え直しを試みることにする。具体的には、これまでの長距離走で重点的に扱ってきた「記録の向上」へのこだわりに加えて、これまであまり意図してこなかった長い距離を走ることで生成される（心地よさ）（爽快感）といった運動の「快感覚の習得」も一つの運動を学ぶ型と考え、学習としての成立を意図した。

## 単元の目標

### ① 興味関心・意欲・態度

長距離走の楽しみ方を自ら選択し、その選択内容に興味や関心を持って取り組もうとする。さらに、仲間と関わり合いながら、特性に積極的に触れようとする。

### ② 思考・判断

自らが選択した長距離走の楽しみ方や魅力に触れるために、技術・技能や既習の練習方法を踏まえた上で、自分なりに運動の仕方を考え、実践することができる。また、運動する中で出てきた課題を、練習方法の工夫や種目のとらえ方を変えることで解決し、より深い楽しみ方や新しい魅力を発見することができる。

### ③ 技能

自らが選択した長距離走の関わり方について、実践上必要な技能を身につけることができる。

### ④ 知識・理解

運動の実践を通して、自らが選択した長距離走の関わり方の特性を理解することができる。また、その運動の意味や価値を追究するための方法を理解することができる。

## 授業の実際

単元開始前の生徒の様子から、授業に入った時、本単元において対極に位置すると思われる機能的特性である「記録の向上（達成型）」や「勝敗（競争型）」と、身体論的視点の「快感覚の習得」二つの学びの型に、生徒の志向は完全に二極化するという予想をたてていた。しかし、実際には予想に反して、二つの極の間を行きつ戻りつしている生徒が思いのほか多かった。

例えば、長距離走の快感覚の一種であるセカンドウィンドをより感じるためにペース走をしていた生徒が、記録の向上につながるヒントをそのペース走から得ることができ、練習の目的が記録の向上に移行していったりしている。これは、決して曖昧な学習ではなく、偶発的ではあるが、スポーツが本来的に持つ多様性を楽しんでいる様子として捉えてもよいであろう。

### ◎ 単元途中で伝言板に貼られた意見（学級のわくを越えて相互に意見交換ができるように、授業中の発見や自分の感想などを自由に載せられるように、学習掲示板を設置してある）

- ・遅すぎても、速すぎても疲れる。人にはそれぞれ自分のペースがあることが判明。自分にあったペースを見つけると結構楽に走れる。
- ・自分のペースを作ると、スンゴク気持ちよく走れる。もっ最高だよ（笑）。
- ・セカンドウィンドに入る前に休んだら、逆に疲れた。
- ・「自分にあった呼吸を見つける方法」すごいゆっくりな一定のペースで、7周以上走ってみる。そのときに、呼吸の仕方を決めて走る。そうすると約5周を越すと苦しくなくなり、楽になるゾ～。
- ・走る時なるべく呼吸の仕方を『吸って、吸って、吐いて～』を心がけると気持ちいい。もう最高～！！
- ・長距離走を走る時、自分の「足音」と「呼吸」を耳で聞き取りながら走ると、気持ちよく走れて、記録もグーンと向上したよぉ。
- ・他の長距離走を走っている人を見てると、手足がリズム良く動いてすごかった。まねしてみたら、前より少し楽に走れるようになった。
- ・走る時は背中を丸めないで、背筋を伸ばして前を見て走った方が“ラク”だと思う。
- ・手を下の方で振るようにしたら、楽になって記録もUp。
- ・長距離走と一口で言うけど、いろいろな走り方があって、走り方を変えるだけで速くなったり、遅くなったりするのがおもしろい。



- ・運動場を走るのには1周200mしかないけど、とっても長くつらい旅だと感じる。でも外周（学校周辺のロード）はいろんな景色が見えて、楽しく走ることができる。速く走りたいと思うけど、まずは楽しくはれることが一番大事だと思う。行き詰まった人は外へGo！
- ・体育の時間で自分のペースを見つけることができたから、スポーツテストの持久走がいつもより楽に、気持ちよく走れた。
- ・走り終わって汗が出て、清々しくて気持ちいい。

◎ 単元終了時の学習レポートから

- ・陸上競技、特に持久走は毎年すごく苦しくて、はっきり言って大嫌いだった。だからこそ、選択したんだけど、良かったと思う。自分にあった呼吸を見つけたら、大分走るのが楽になったし、ペースアップの練習も身に付いた。始めた頃は慣れるまで苦しかったけど、慣れたきたらグラウンドの砂、土が輝いて見えて、風が爽やかに感じられた。苦しくない訳じゃないけど、『楽しい』って思えるようになり、気持ちの面では良くなった。それに目的だった持久走のタイムが1分近くあがったので、すごくうれしくて、陸上競技の楽しさはこういった瞬間にわかるんだと思った。
- ・長距離走は本当に嫌いだった。でも、今回の授業で、記録じゃなくて、走る楽しさを中心にやってみて、少し気持ちが変わった。
- ・今回の授業で長距離走＝『苦しい』とか『遅い』といったマイナスのイメージが小さくなった。それは、私にとって今までの長距離走は、タイムとか友達とか、何か別のもので競い合っているだけで楽しくなかったけど、今は、自分と競い合っているからだと思う。今までの嫌なイメージが100%なくなったとは言えないけど、長距離走の良さが少しわかったと思う。
- ・今までは長距離走＝きつい＝嫌い！！苦手！！というイメージがものすごく強くて、自分から進んでやったことなんてなかったけど、今回授業でやってみて、自分のペースで無理なくやれば楽しいということがわかった。相変わらず、タイムを計ったり、順位を競うのは好きになれないけれど、ただ、長い距離を走るだけなら、喜んでとまではいかないけれど、嫌いとか、苦手とか、そういう気持ちにはほとんどならないと思う。今の自分は技術面では全然優れていないけど、長距離走は嫌いなスポーツからなかなか好きなスポーツぐらいにはUpしたと思う。

### 授業のまとめ

今回の提案授業は選択制でおこなった。これまでの機能的特性に依拠したものに加えて『楽しく』という選択項目を入れ、楽に走ることを学習として認め、走っている時に身体で感じる快感を追究する身体論的な視点を取り入れてみた。生徒の学習途中の意見をみると、快感を感じる走り追究する過程で、ペース、リズム、フォームなど、長距離走における様々な要素についての発見や意見がみられる。このような学習課題や発見が多く生徒から次々と出されている背景には『身体への感じ』が生み出す主体的な学習への取り組みがあると考えてもよいであろう。生徒が自発的に長距離走に取り組むからこそ見つけられた課題や発見は、こだわりとなって、生徒自らが追究する学習となり、学びを生成している様子が見取れる。

そのことは、授業終了時に長距離走を「好き」・「まあまあ好き」と肯定的なイメージを持った生徒が全体の81%と、授業開始時とは比較の対象とならないくらいに、飛躍的に増えていることからわかる。さらに生徒のまとめレポートもそのことを裏付けていると言えよう。

## 6. まとめと今後の課題

スポーツをすることで身体に生起する快感覚を体育学習に取り入れることで、学習のまとまりがなくなるのではないかという不安もあったが、実際に子どもたちの学習はそれまでの学習と比べても遜色のないどころか、それ以上の意欲を感じられる授業が展開できた。また、身体論的な視点は、機能的特性と対立するものではなく、相互に刺激し合って、子どもの学びを拓げていくことも確認できた。

さらに、後日談ではあるが、体育を苦手としていた女子生徒2人が、連れだって進学先の高校で長距離走をやりたいと陸上競技部へ入部した。彼女たちに話を聞くと、今回の授業での体験が元となって入部したということであった。

そうした意味で体育の授業構成に身体論的な視点を加えることは、子どもとスポーツの関わりをさらに豊かにすることにつながるだけでなく、体育学習を身体から再構成し、豊かな学びを拓く可能性をもったアプローチ方法であると言える。

今後の課題としては、授業実践において、他のスポーツ種目では身体に係る視点をどのように授業レベルで学習化するか。また、客観的に捉えにくい身体について、どのように評価へ取り入れていくかという点である。今後、継続的に実践研究をすすめていきたい。

### 【参考文献】

- \*1 野村直正：「身体」、『現代哲学を学ぶ人のために』 世界思想社
- \*2 石田秀実：「東洋的身体論が見直されるわけ」『体育科教育』1999:1
- \*3 亀山佳明：「スポーツと日常生活に見る滑走感覚」、井上俊（編）、『現代文化を学ぶ人のために』、世界思想社、1998
- \*4 中村雄二郎：『臨床の知とは何か』、岩波書店、1998
- \*5 松田恵示：「体育とスポーツ」、井上俊他編『スポーツ文化を学ぶ人のために』、世界思想社、1999、p196-199
- \*6 島崎仁：『スポーツに遊ぶ社会に向けて』、不昧堂出版、1998、p156
- \*7 竹之下休蔵：『プレイ・スポーツ・体育論』、大修館書店、1972
- \*8 嘉戸脩：「「楽しい体育」とは何か」、日本体育社、1984.4
- \*9 島崎仁：『スポーツに遊ぶ社会に向けて』、不昧堂出版、1998、p172
- \*10 菊幸一：「学習内容の構造化」、中村敏雄編『戦後体育実践論 第2巻 独自性の追求』、創文企画、1997、p200-201
- \*11 松田恵示：「運動の特性を生かした学習指導」、中村敏雄編『戦後体育実践論 第3巻 スポーツ教育と実践』、創文企画、1998、p86
- \*12 佐伯聰夫：「運動の特性と子どものつまづき」、『体育科教育』、大修館書店、1980、9月号、第28巻 10号
- \*13 松田恵示：「運動の特性を生かした学習指導」、中村敏雄編『戦後体育実践論 第3巻 スポーツ教育と実践』、創文企画、1998、p86
- \*14 多々納秀雄：「所謂“楽しい体育”論の批判的検討」、『九州大学健康科学センター第12冊別巻』、1990、p83
- \*15 青木眞：「基本の運動を問い直す」、『体育科教育』、大修館書店、1985、5、第33巻 5号